

葛原の大木

むかし、むかし、砂谷葛原から河内に越す山の上に、とても大きな杉の木が一本立っていました。それは雲を抜き、影は遠くに届き、近くの村は日陰になり、田畑の作物はさっぱり出来ませんでした。

又この木は夜になると、不気味な光を放ちました。遠く五日市の沖合いで漁業をするのにも妨げになっていました。そこで、切り倒してしまおうという話もありましたが、大杉は樹の主で、触ると「たたり」があるというので切る人がいません。大杉は、さらに大きくなって日陰が広がり作物が出来ないので、暮らしに困る人が多くなりました。

そこで、葛原の治郎太という勇気のある木こりさんが、
「村の人のためなら、どんなたたりでも受けよう」とみんなが止めるのも振り切って、斧を担いで登ってゆきました。

「えいさ、えいさ」
と釜を打ち込み、せっせと切り続けましたが、大杉はいくらも切れないのに日が暮れてしまいました。

「こんなことで、くじけてたまるか」
治郎太さんは山小屋を作り、そこに泊り込んで毎日切り続けました。何日目か大杉の根元を半分以上切ったときです。メリ、メリと大地も避けんばかりの音を立てて大杉は倒れました。それはものすごく、治郎太さんの体は、微塵に碎けて飛び散りました。
治郎太さんのお陰で村の作物は良く実るようになり、漁業する人の妨げもなくなりました。村の人たちは大杉のあったところに祠をつくり、山仕事する人の守り神としました。

大杉が倒れて木の葉が飛んだところを「櫛（ゆずりは）」といい、木の先だったところを「木末（こずえ）」といい、木の中ごろを「中伏」といい、木の立っていたところを「大杉」といって、今もその地名が残っています。